

カナダにおけるジュニア選手育成の取り組み

岡崎和伸¹⁾ 榎本靖士²⁾

1) 大阪市立大学 2) 筑波大学

世界ジュニアの会期中に、競技場およびその周辺施設で各国コーチなどと交流し、他国のタレント選手育成状況やその背景を調査した。特に、カナダのタレント育成担当コーチ (Mrs. Carla Nicholls, National Event Group Coach, National Talent Development Coach) とタレント育成システムについて情報交換を行ったので、その概要を以下に報告する。

[カナダのタレント育成システムの概要]

ジュニア～ユース期での練習のしすぎによる疲弊 (オーバートレーニングやバーンアウト) はカナダでも問題視されており、その状況を改善してシニア期にピークパフォーマンスを発揮させ、世界で通用する選手を育成するためにタレント育成システムを構築してきている。2008年より現在のシステムを構築してきており、現在、そのシステムの活用を開始している。システムの概要については、アスリートは4つのカテゴリー (カテゴリー1: トップ、カテゴリー2: 2016年照準、カテゴリー3: 2020年照準、カテゴリー4: 2024年照準) のピラミッド型の中で捉え、各カテゴリーでの到達目標を設定し、上位カテゴリーへ順次移行していくように、競技力強化に加えて選手およびコーチの教育を進めるシステムと理解される。

[タレント育成システムの構築]

カナダのタレント育成システムは、イギリスなどヨーロッパ諸国やオーストラリアなどのシステムを参考にして構築してきた。また、全世界160名以上のトップアスリートの年次推移を調査し、アスリートのキャリア (競技開始年齢、競技歴、競技成績、各年次到達レベルなど) をデータベース化し、各年齢で到達すべき競技レベルとピークパフォーマンス

に至る年齢を設定した。トップアスリート情報の多くはインターネット (<http://www.all-athletics.com/>) で手に入れた。

[システムの現状]

全ての選手は基本的にクラブチームに所属し、クラブチームのコーチの指導を受けている。高校や大学ベースの活動もあるがその比重はあまり大きくない。コーチ教育システムを構築しており (<http://www.athleticscoaching.ca/splash/>)、全てのコーチはその課程を修めている。トップカテゴリーの選手には、カナダ陸連所属のパーソナルコーチが指導にあっている。なお、トップカテゴリーの選手やパーソナルコーチは、カナダ陸連 (Athletics Canada) からサラリーを得ている。選手のサラリーは、大きくA、B、C、Dに分けられ記録や活動状況などで決定されている。

パーソナルコーチ以外に、カナダ陸連には National Event Group Coach、Head Coach などに加え、National Talent Development、High Performance、Olympic Performance and Planningなどを専属で担当する強化担当コーチが複数人いる。強化担当コーチは比較的大きな権限を持っており、選手の練習内容やコンディショニング管理に関して、選手やコーチに指示を与えている。

ナショナルトレーニングセンターに相当する施設は、カナダ東西に2カ所ある (以前7つ存在したセンターを全て閉め、2つに統合した)。ちなみに、カナダ陸連の予算の約90%は政府から、残り約10%がスポンサーからである。

[選手・コーチに対する取り組み]

年齢に応じた選手教育を進めている。自分がキャリアのどの位置にいて、今後どんな過程を経てシニ

ア期にピークに至るかについて、それぞれの選手にキャリアマップを示して選手とコーチの教育を実施している。また、選手に必要な知識（フィジカル、栄養、メンタルなど）の教育（それぞれの専門家を大学などから招いている）も実施している。

選手には、基本的なパフォーマンステストを各種目5つほど実施している（多すぎると煩雑なため）。カナダ陸連主催合宿など（現在は年1回実施。近々、年2回にはしたい意向）で初めの数日で実施している。この時、選手およびコーチを対象とし、各種の教育セミナーも実施している。なお、パフォーマンステスト結果は強化担当コーチが評価し、選手およびコーチとともに現状を把握するだけでなく、パフォーマンス低下時などには練習内容やスケジュールの見直しなど、積極的に介入が行われる。また、パフォーマンステスト結果は、今後のタレント育成に向けた基礎資料としても蓄積している。

[その他]

今回の世界ジュニアでは、カナダ選手は予選でパーソナルベストを更新できたが、決勝では十分にパフォーマンスを発揮できない者が多かった。試合に向けたピーキングについて、今後の課題であると述べていた。タレント移行（陸上競技種目の転向）については、今後、積極的に進めていく課題と捉えていた。また、パーソナルコーチや強化担当専門コーチへの女性の登用の重要性も上げていた。夏季オリンピックに向けた暑熱対策については、これまでのオリンピックに向けた対策で多くの情報を蓄積しているようである。